

踏み跡 < My mountains >

那須	カッコー平から茶臼岳、朝日岳	No.060
----	----------------	--------

昭和39年の秋の茶臼岳、翌年3月のスキー以来久しぶりの那須。一年前のスキーの時のことを思い出してみると、那須の冬は風が強いということがまず第一の特徴と言えよう。過去二回のリラックスした旅に比べて、今回は純然たる冬山登山、しかも初の試みである冬のテント生活もある。

予定では第一日目に三斗小屋を経て大峠まで入り、第二日目に大倉山ピストンの上もとのコースを戻るというウルトラスケジュールだった。しかしながら、これは那須の突風の前にもの見事に消し飛んでしまった。

昭和41年3月4日

上野22時40分発、奥羽線經由秋田行。東北本線の普通列車は中央線や上越線と違って登山客はいない。まだ早すぎて眠くならない。しかし、四時間足らずしか乗っていないので真面目に眠らないといけない。列車の振動音を聞きながら、目を閉じて眠くなるのを待つことにした。

昭和41年3月5日

黒磯2時59分着。私と恩田のほかには誰も下車しなかった。秋田行の赤いランプの軌跡が暗闇に吸い込まれるように消えていくと、駅舎は実に静寂そのもの。比較的寒さの弱い晩、待合室には火の消えたストーブが手持ち無沙汰に座っており、その側に冷え切ったベンチがいくつか。寝袋を出してベンチの上で一眠り。

5時15分起床。二時間ぐっすり眠ることができた。駅舎の中で作った朝食は餅入りのタンメン。通勤客だろうか、どこからともなく人の気配がし始めた。

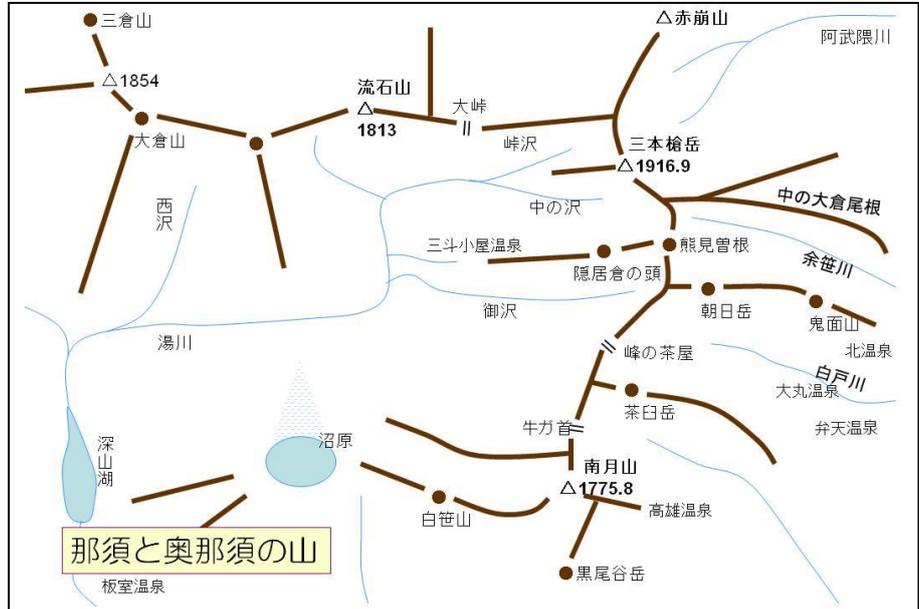
バスは7時15分発。湯本で大丸温泉行に乗り換え。8時15分、バスを降りた大丸温泉は1266m、降り出した曇と迫り来る寒さ。湯本からバスに乗った何人かを合わせて、登山客は10人ほどだろうか。列車、バスと体温を守ってくれた文化圏から放り出されて、今更のように三月の曇の冷たさを感じる。

ポンチョをかぶって8時40分に出発。ピッケルは使わず、ストックを一本ずつ持つ。空模様から受ける感じではどう見ても夕方ようだ。温泉からロープウェイ駅のカッコー平(1383m)まではバス道で、さしたる苦労はいらないが、カッコー平を過ぎると昨夜の暖かさが災いして、雪は腐っており脚をとられて歩きにくい。

那須おろしと呼ばれているモンスーン特有の風が体に当たり始めた。路傍でポンチョを脱いでオーバースボンとヤッケを身に付けると、鉾山事務所の破屋が風でちぎれて目の前を飛んでいくのが見えた。

やがて雪のなくなった(つまり強風帯であることを意味する)溶岩帯に入る頃、あの秋晴れの日に朝日岳の眺めを楽しんだ山道も、霧と強風だけとなってしまった。

予期せぬ時に吹いてくる突風というやつはやっかいなもの。風の治まった時を狙って歩き出すと、岩陰から体が出るとともにビュンと吹き付ける。すかさずストックを使って三点確保、また治まった時に歩き出す。時には胸もこすらんばかりの前傾姿勢で歩く。すると突然の無風状態になり、前に体重をかけていた体は投げ出されてしまう。ハッとすると又次の突風。今度は近くに岩場がないから三本足で立つが風で起こされて後退してしまう。やむを得ず四つん這いになり一寸ほどの石にしがみつくと、すると背中を風が吹き抜ける。ベルヌーイの定理で、背中の中の荷物に合わせて80Kgほどの体がふわっと浮く。爪を立てて石を掴んでいる指先がズ



踏み跡 < My mountains >

ズツと引っ張られて空を掴む。また次の石、次の石、岩陰がある、頭から飛び込む、ホッ!!

他のパーティのひとりが無風を狙って岩陰から飛び出した途端にビュンと吹かれて一尺ほど体が浮き上がり、次の無風でドスンと背中から投げ出された。あと1m飛ばされていたら谷に転げ落ちたかもしれない。前方にかすかに峰の茶屋が見えるところまで来たものの、風はなおも止まぬどころか雪を混ぜて叩きつけてくる。瞬間風速 30m を越えるかもしれない。あるひとつの岩陰から一步前進二歩後退が繰り返されるうちに、それは甚だ無意味な抵抗に近いことがわかってきた。こんな乱闘まがいのことで体力と体温を消耗させるのは馬鹿げている。ひとまず風のないカッコー平まで戻ることにした。

身を翻して風に背を向けると、今まで強風の猛烈な殺気によって生気を失っていた頬が徐々に温かくなってくると感じる。頬と顎はしばらくは麻痺したようで、口もうまくきけないし笑うこともできない。口の周囲の筋肉を使わずに笑うことがいかに空々しいかがよくわかった。

追い風に帆をあげた舟のように、二尺のキスリングに風をたっぷり受けて気持ちよく下っていくことができる。11時30分カッコー平着。朝ここを通過した頃はまだ風がなかったが、今では駅舎を一步出ると風速10mの洗礼を受けることになる。

しばらく様子を見たが特別な進展もないのでこの近くに幕営することにして、場所探しを開始。風の弱いところと言うと運休中のロープウェイ駅舎の入口付近しかない。スコップとピッケルとで凍結した雪をかき削り、天幕設営。夏用テントなので周囲からの風の進入を防ぐべく風上に雪囲いを作ってやった。12時幕営終了、天幕の中は-2度。

15時夕食準備開始、17時シュラフ・イン。風が強いので、静かな夜というわけにはいかない。

ポリタンクと登山靴の凍結を防ぐ目的で、シュラフの中へ一緒に入れて寝る。どのあたりに置けば寝心地が良いか、初めての体験なのでゴソゴソ・モソモソ、色々試行錯誤のうちに意識不明になった。

昭41年3月6日

寒くて目が覚めたこと数回。そして4時50分起床、天幕の中は-3.5℃。まずいことにコンロが故障。冬山ではコンロは命綱も同然。必死の思いで約一時間格闘の末、ようやく青い炎がポーっと上った時のうれしさは忘れられない。朝から一時間のロスタイムは痛い。5時45分炊事開始、

晴れた空にくっきりと描かれた茶臼岳と朝日岳の雌雄を思わせる佇まいは、昨日の奮闘を思うと異次元の



出来事のようなものである。<写真:天幕場からの朝日岳>

天幕を撤収し、パッキングしてキスリングはデポしサブザックでのアタックとする。7時55分オーバースボン・オーバーシューズ・アイゼンを着けて遅い出発。腐った雪と強い風で悩まされた峰の茶屋への道も今朝は快調そのもの。雪はアイゼンに適した状態に凍り、風もない。一時間ほどで峰の茶屋に到着(8時45分)。

茶臼岳へ20分のアルバイト。所々に硫黄の臭いと熱い湯気の噴出したところがあり、息を止めることもある。

茶臼岳(1915m)9時05分着、2000mにも満たない頂上ではあるが、眺めは素晴らしい。目の前に大倉山と三倉山、そこからずっと男鹿山塊が南に尾を引き、大峠の東にどっしりとした三本槍ヶ岳、清水平が予想外の広さに見え、赤崩山の円錐型のかわいらしさ。朝の眺めとは打って変わってチョコナンと小さくなった黒い朝日岳。そしてかなたに見えるのは飯豊か磐梯か、その右は蔵王か。

アルプスの山しか知らぬ連中にはわからない眺めだろう。

登山靴は凍ってしまい木靴のように硬い。足首の感触も露骨に空々しい。9時30分、峰の茶屋に戻り20分の小休止の後、今度は朝日岳へ。朝日岳(1896m)10時30分、今まで何とはなしに歩いていた茶臼岳が

踏み跡 < My mountains >

典型的なコニーデ式火山であることに気づかせてくれる。こんもりと丸い山容、わずかに着けた雪と白い煙。すぐ下に見える三本槍まで広がる清水平は一面の銀世界で、なだらかな傾斜が三本槍と朝日を結んでいる。

<茶臼岳から 左:三本槍ヶ岳 右:朝日岳>

両峰のピストンを終えて峰の茶屋に戻ると

10時55分、もう大倉山方面はガスに隠れ出し、

雪がちらつき始めた。吹かれないうちに下ろう。カッコー平の幕営地帰着11時30分。オーバースボン・オーバーシューズ・アイゼン等の重い装備をはずして、デポした荷をパッキングし直し、11時45分下山開始。

大丸温泉に11時55分帰着。湯本発13時のバスで家路に着いた。

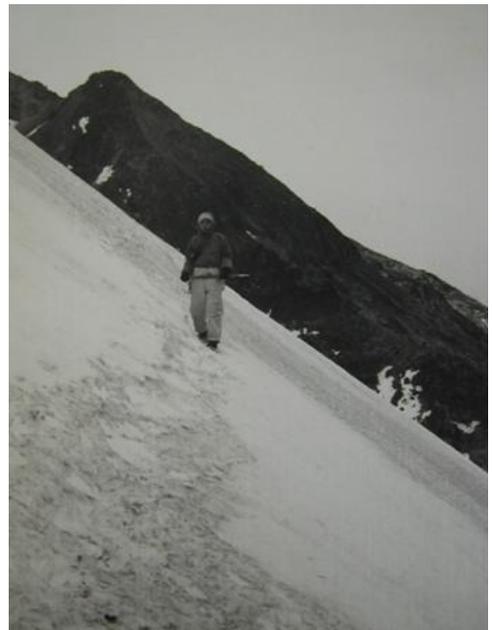
かくして、殺気に満ちた季節風に痛めつけられた山行は終幕を垂れた。皮膚も忘れかけていた暖房のありがたさにため息をついている間にも電車は関東平野を南へ南へ、都会の喧騒を目指してひた走り、我々を二日前の世界に連れ戻そうとしている。



以上



<茶臼岳を見下ろす>



<緊張のトラバース(後ろは朝日岳)>

(修正・更新:2023年11月)